

年の神遺跡

玉名市岱明町野口における宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告



2023

玉名市教育委員会

はじめに

玉名市は熊本県北西部に位置し、菊池川下流域に属しています。旧石器時代から現代までの長い歴史を持った地域で、古くから温泉のまちとして知られています。

玉名市教育委員会では、様々な開発行為に基づいた埋蔵文化財調査を実施しており、その成果を公表することによって、玉名市の教育・文化の発展に寄与するものと考えています。

本書は、玉名市岱明町で実施した年の神遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。発掘調査におきましては、各方面から多くの方々に多大なご協力とご尽力を賜りました。改めてここで厚く御礼を申しあげます。

令和5年3月

玉名市教育委員会
教育長 福島 和義

例 言

- 1 本書は玉名市教育委員会が令和4年度に実施した年の神遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は玉名市教育委員会文化課が実施した。
- 3 発掘調査は齋父雅史、石松 直が担当し、報告書の執筆と編集は石松が担当した。
- 4 現地調査での撮影記録については、田中、齋父、石松が行った。
- 5 現地調査での土色の記録は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 / 新版標準土色帖を用いて目視による観察を行っている。
- 6 遺構の記号は文字表記（例：竪穴建物）の後にS番号を付与している。
- 7 整理作業は、玉名市文化財整理室で実施した。
- 8 遺物の実測は齋父、石松が行い、トレイスは石松が行った。
- 9 遺物実測の縮尺は基本的に土器が1/4、石器・石製品が1/2であるが、任意に縮尺を変更しているものについては別記している。
- 10 出土遺物や調査記録は玉名市教育委員会文化財整理室にて保管している。
- 11 出土した遺物のうち、勾玉の材質鑑定については、熊本大学文学部准教授 大坪志子氏に、石權（天秤權）については福岡大学名誉教授武末純一氏に御教示いただいた。

本文目次

はじめに 例言	i
本文目次 挿図目次 写真目次	ii
第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3章 調査結果	
第1節 基本土層と遺構面の解釈	2
第2節 検出された遺構	4
第3節 包含層出土遺物について	9
第4章 まとめ	12
参考文献	12
報告書抄録・奥付	

挿図目次

Fig.1 玉名市の位置と遺跡範囲	2	Fig.9 土坑 S-015 出土遺物	7
Fig.2 今回の調査位置	2	Fig.10 土器集積遺構 S-006 出土遺物	7
Fig.3 基本土層と遺構面の解釈（模式図）	2	Fig.11 溝状遺構 S-012 平面・断面図 (1/100)	8
Fig.4 年の神遺跡遺構平面・断面図 (1/200・1/100) -3	8	Fig.12 溝状遺構 S-012 出土遺物	8
Fig.5 壁穴建物 S-013 平面・見通し断面図 (1/100)	4	Fig.13 ピット S-009 出土遺物 (1/3)	9
Fig.6 壁穴建物 S-013 出土遺物 (3のみ 1/1)	4	Fig.14 ピット S-023 出土遺物 (1/4)	9
Fig.7 壁穴建物 S-010 平面・見通し断面図 (1/100)	5	Fig.15 包含層出土遺物	10
Fig.8 壁穴建物 S-010 出土遺物	6		

写真目次

PL1 土坑 S-015 出土獸骨	7	PL16 壁穴建物 S-010 完掘	15
PL2 ピット S-009 遺物出土	9	PL17 壁穴建物 S-010 完掘	15
PL3 ピット S-023 遺物出土	9	PL18 溝状遺構 S-012 検出	15
PL4 包含層出土遺物赤彩土器	10	PL19 溝状遺構 S-012 完掘	15
PL5 調査区全景	13	PL20 作業風景遺構検出	15
PL6 壁穴建物 S-013 検出	14	PL21 作業風景遺構掘削	15
PL7 壁穴建物 S-013 検出	14	PL22 土器集積遺構 S-006 出土遺物	16
PL8 壁穴建物 S-013 断面	14	PL23 壁穴建物 S-010 出土遺物	16
PL9 壁穴建物 S-013 完掘	14	PL24 壁穴建物 S-013 勾玉	16
PL10 壁穴建物 S-014 検出	14	PL25 壁穴建物 S-010 磨製石剣	16
PL11 壁穴建物 S-014 検出	14	PL26 壁穴建物 S-010 石椎（天秤椎）	16
PL12 壁穴建物 S-010 遺物出土	14	PL27 ピット S-023 出土砥石	16
PL13 土器集積遺構 S-006 遺物出土	14	PL28 紡錐型土弾	16
PL14 土坑 S-015 断面	15	PL29 ピット S-009 模倣土師器	16
PL15 土坑 S-015 完掘	15		

表目次

Table1 遺物観察表	11
--------------------	----

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

本調査は、玉名市岱明町野口 2466-1において宅地造成工事が計画されたことに起因する。当該開発計画地は周知の遺跡である年の神遺跡の範囲に属していたため、令和3年12月3日に確認調査を実施した。その結果、堅穴建物といった遺構や多くの弥生土器を確認したため協議を行い、工事主体者との間で協定及び委託契約を締結した。令和4年1月25日付けで、文化財保護法第99条の規定に基づき発掘調査の通知を行った。開発に伴い遺構の保存が難しい範囲であった88.8mについては発掘調査を実施することとし、令和4年2月1日から発掘調査を行い、令和4年3月11日に現地作業を終了した。整理作業と報告書作成は令和4年8月1日から開始し、令和5年3月17日に完了した。

第2節 調査体制

発掘作業及び整理作業・報告書の作成には以下の体制により実施した。

発掘作業	(令和3年度)	報告書作成作業	(令和4年度)
調査主体	玉名市教育委員会	調査主体	玉名市教育委員会
調査責任	教育長 福島和義	調査責任	教育長 福島和義
調査総括	教育部長 藤森竜也	調査総括	教育部長 藤森竜也
	文化課長 伊藤忠浩		文化課長 平川裕一
	文化課長補佐兼文化財係長 田中康雄		文化課長補佐兼文化財係長 田中康雄
調査担当	主査 薩父雅史	整理担当	主査 薩父雅史
	技術主任 石松 直		技術主任 石松 直
発掘作業員	緒方雄二 村上厚生 村松美樹	整理作業員	北嶋百合子 藤井めい子
	吉川ゆかり 寺本哲也 住友須美子	調査指導	能登原孝道 宮崎敬士 大坪志子
	島村倫子 津崎洋子 松本典子		武末純一 (敬称略)

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

玉名市は熊本県北西部に位置する都市で、人口約6万4千人（令和4年12月現在）、面積が約152平方キロメートルを有している。一級河川である菊池川が市を南北に分けるように、内海である有明海上に注いでおり、菊池川周辺では支流である木葉川や繁根木川によって形成された堆積平野が広がり、肥沃な土壤を生んでいる。市の南東側には阿蘇山より火山活動が古く、馬蹄型カルデラで有名な金峰山がそびえている。北側には筒ヶ岳がそびえ、そこから延びる小岱山地や台地の一つに年の神遺跡が存在している。

第2節 歴史的環境

玉名市は旧石器時代から連綿と人々の生活の痕跡を見ることができ、西照寺備中遺跡ではナイフ型石器が発見されている。縄文時代には有明海沿岸に尾崎貝塚などの貝塚が点在している。弥生時代に入ると遺跡の数が急速に増え、前期では斎藤山貝塚をはじめ、中期には大きな集落や甕棺墓が確認されており、塚原遺跡や今回調査を行っている年の神遺跡も含まれている。弥生時代後期には拠点集落であった高岡原遺跡や大原遺跡などが出現する。古墳時代に入ると山下古墳や院塚古墳といった前方後円墳が形成されており、後期に至ると大坊古墳や永安寺東古墳や永安寺西古墳といった装飾古墳が築造され、この地域特有の文化が見られる。中世に入ると大野別府や大野荘といった荘園が数多く形成された。近世に入

ると玉名は熊本藩に属し、高瀬町を中心に大坂へ向かう米の積み出し拠点として発展を遂げた。しかし、近代に入り明治10年には西南戦争の激戦地の一つとなり、高瀬町周辺は焼損している。それ以降、九州鉄道株式会社（現JR九州）により鹿児島本線が建設され、平成に至ると九州新幹線が開業している。

今回の調査は、弥生時代中期から後期を中心とした年の神遺跡である。年の神遺跡は岱明町野口の友田川左岸の台地上に広がる遺跡で、斐柏墓や支石墓が多く確認されていることで知られている。中でも支石墓の斐柏からゴボウラ貝製の腕輪7点（市指定有形文化財）が出土している。



(Fig. 1) 玉名市の位置と遺跡範囲



(Fig. 2) 今回の調査位置

第3章 調査結果

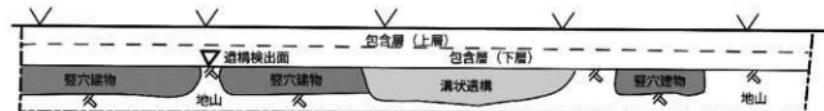
第1節 基本土層と遺構面の解釈

今回の調査は確認調査の結果から、包含層の厚さや遺構面の深さを土層断面から確認することができていたので、おおよそ見当は付いていた。

基本土層は以下のように解釈している。表土から直下の層約20cmまでを遺物包含層として認識し、一部で地山面が見えているので、そこで遺構検出を実施している。遺物包含層は、2層に分かれており、上層の土色が7.5YR 2/2 黒褐色土、下層が7.5YR 2/1 黑褐色土である。包含層内に弥生時代の土器や黒曜石製の石器や剣片を多く含んでおり、古代の土師器が混入していることから古代以降に大規模な整地を行ったものと思われる。

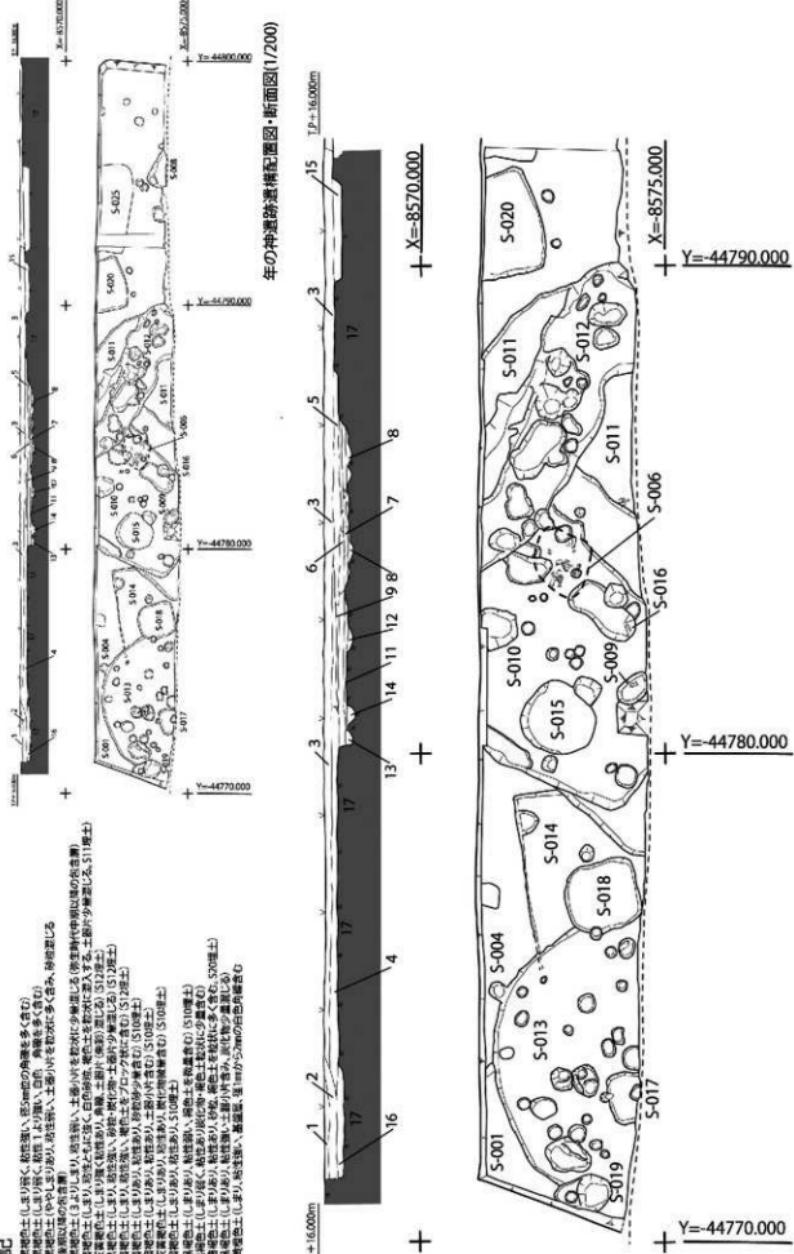
遺構面は古代から中世の包含層を除去した後、地山である7.5YR7/8 黄橙色粘性土が見える高さで黒褐色が複雑に切りあっているため遺構検出を行った。

検出の結果、同じような土色が複数確認され、遺構の切りあいの判別は非常に難しく遺構検出の精査は不十分であった。また、ピットが数多く検出され、遺構内から須恵器の模倣土師器壊などが出土していることから掘立柱建物等の存在することも考えられるが、今回の調査では明確に検出することはできなかつた。



(Fig. 3) 基本土層と遺構面の解釈（模式図）

- 土層注記**
1. 17.5mE/2高礫層土 (より下層)、粘質土、砂質土の複合を多く含む。
 2. 17.5mE/2高礫層土 (より下層)、粘質土、砂質土の複合を多く含む。
 3. 17.5mE/2高礫層土 (より下層)、粘質土、砂質土の複合を多く含む。
 4. 17.5mE/2高礫層土 (より下層)、粘質土、砂質土の複合を多く含む。
 5. 17.5mE/2高礫層土 (より下層)、粘質土、砂質土の複合を多く含む。
 6. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 7. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 8. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 9. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 10. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 11. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 12. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 13. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 14. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 15. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 16. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 17. 10.9mE/1灰質粘土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 - 17.5mE/2高礫層土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。
 - 17.5mE/2高礫層土 (より下層)、粘質土、砂質土を多く含む。



(Fig. 4) 年の神遺跡遺構平面図・断面図 (1/200) (1/100)

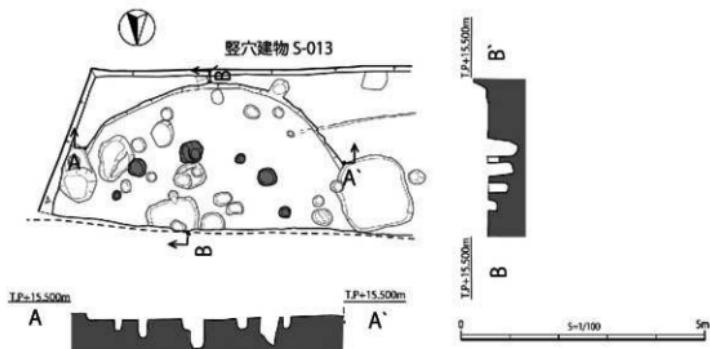
第2節 検出された遺構

今回の調査では、堅穴建物5棟、溝状遺構1条、土坑5基、ピット40基を検出した。

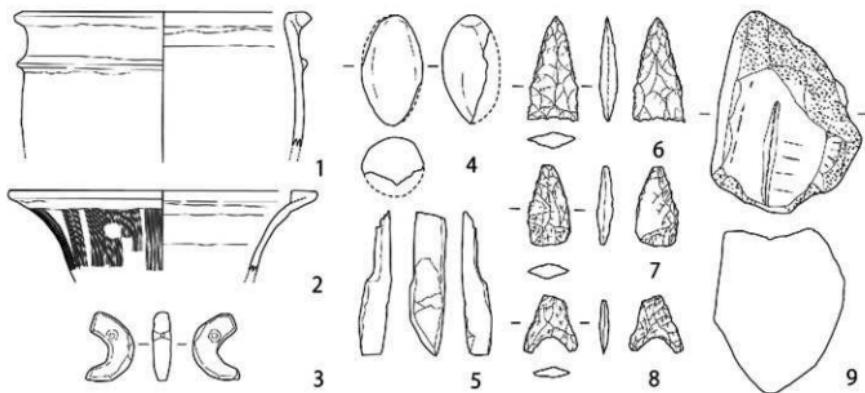
堅穴建物 S-013

調査区東端で検出した堅穴建物である。円形ないし梢円形の形状を呈しているが、遺構は調査区外にも広がり、堅穴建物 S-014 や土坑 S-019 に切られているため詳細な形状は不明である。さらに遺構の上部は落ち込み状遺構 S-001 に切られており、遺構の埋没以降に何らかの削平があったものと想定している。

堅穴建物を構成する遺構としてピットを検出している。類似した遺構が琢原遺跡でも検出されている。当遺構では、炉や周壁溝は確認できていない。



(Fig. 5) 堅穴建物 S-013 平面図・見通し断面図 (S=1/100)



(Fig. 6) 堅穴建物 S-013 出土遺物 (3のみ S=1/1)

出土遺物は弥生土器（1）（2）・土製品（4）・石器（6）（7）（8）・磨製石器（5）・石製品（3）（9）である。弥生土器は甕と壺が出土している。磨製石器は材質が層灰岩の片刃石斧であり、打製石器の材質は黒曜石や安山岩である。

特筆する遺物として、土製品の筋鉢型土弾（4）が1点と、勾玉（3）石製品（砥石）（9）が出土している。土弾は、長さ4.5cm、幅2.5cmで全体の1/3程欠損している。勾玉は長さが1.5cm、幅が0.5cmで、材質は熊本大学文学部准教授大坪志子氏によると、材質はクロム白雲母製である。石製品は产地が大牟田産の砂岩と思われ、砥石として使用した可能性がある。

堅穴建物 S-014

堅穴建物 S-014 は長さが3.5m以上の方形の形状である。遺構上部は削平され、堅穴建物を構成する他の遺構や遺物は確認できなかつたため詳細は不明であるが、堅穴建物 S-010 に西側部分は切り取られているので S-010 より古い遺構といえる。

堅穴建物 S-010

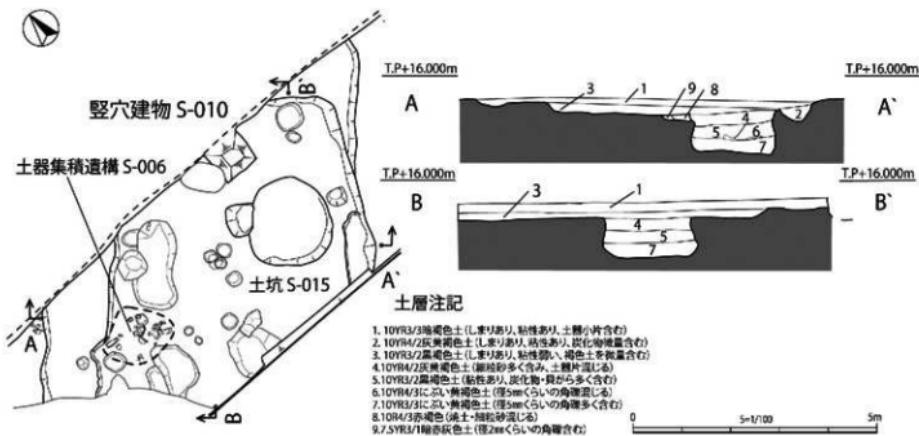
堅穴建物 S-010 は長径5m以上、短径5.5mの隅丸長方形の形状を呈している。切り合いが発生しているので別の遺構の可能性も考えられるが、ひとつの遺構として捉える。構成される遺構は、ベッド状遺構・土坑・炉・周壁溝・土器集積であった。なお、土坑 S-015 と土器集積 S-006 については別遺構として捉えているが、今回の報告では併せて報告する。

ベッド状遺構は堅穴建物を取り囲むように凹型の形状を呈しているが、南側は調査区外なので全体の形状は不明である。先述のとおり、別の堅穴建物の可能性もある。

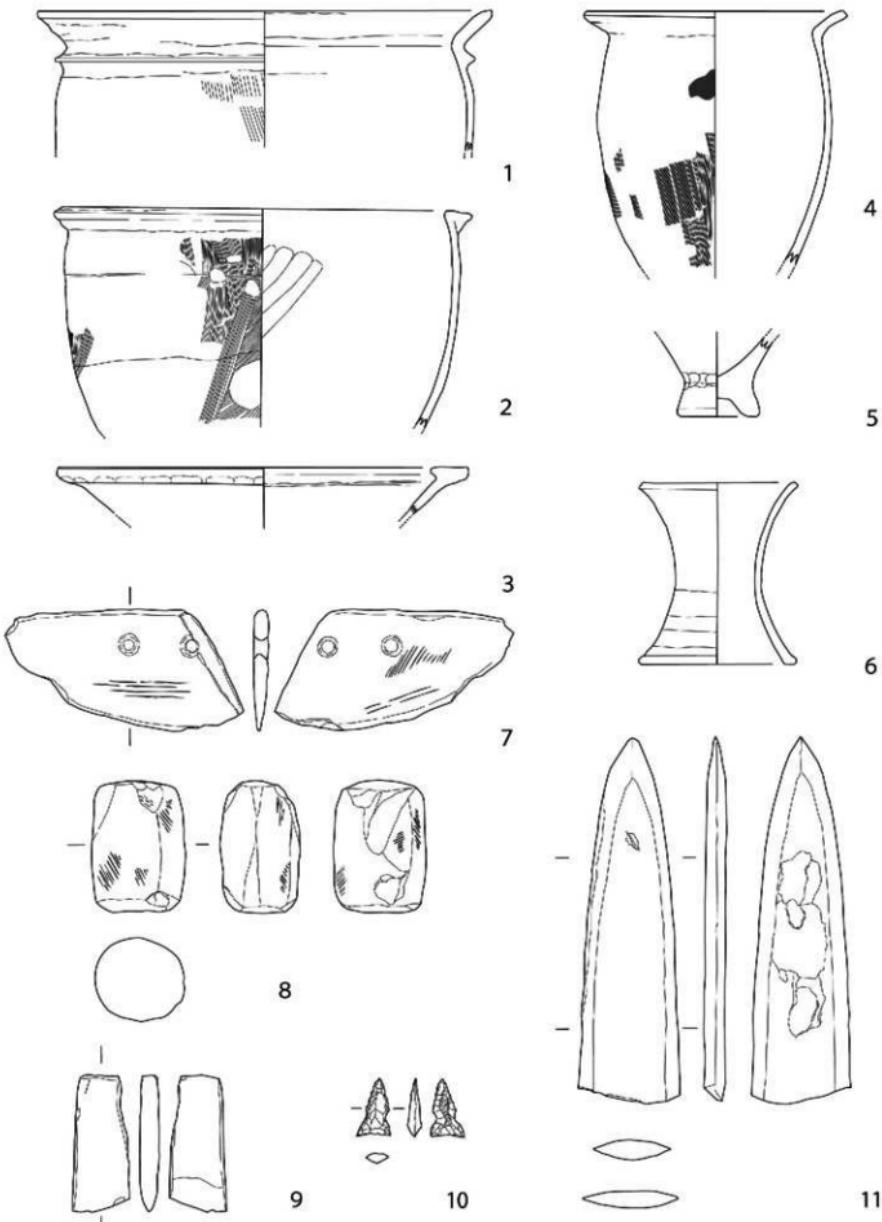
床面で検出された土坑 S-015 は直径約1.3m、深さは約0.7mの円柱状の形状を呈している。埋土は黒褐色の疊交じりで非常にやわらかいシルトで、出土遺物は弥生土器の甕・壺・鉢・磨製石斧をはじめ、骨や貝殻といった動物遺体や炭化物が数多く出土しており、廃棄土坑と考えられる。

土器集積 S-006 は堅穴建物 S-010 と重複する遺構であるが、明確に堀方は区別できていないため、ここでは併せて報告する。遺構からまとまった弥生土器が出土しており、器種は甕・壺・高杯・器台である。

炉は直径0.6mの楕円形の形状を呈している。遺構の深さは0.14mで、一部を土坑 S-015 に切り取られており、炉の周辺は赤褐色の表面硬化が見られる。



(Fig. 7) 堅穴建物 S-010 平面図・見通し断面図 (S=1/100)



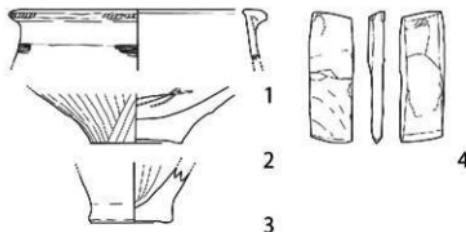
(Fig. 8) 壁穴建物 S-010 出土遺物

出土遺物は弥生土器（1から6）と石器（7）（9）（10）と石製品（8）（11）で、弥生土器の器種は甕・壺・器台である。石器は石鐵と立岩産の輝緑凝灰岩製石包丁と層灰岩製の片刃石斧である。石製品は円柱状石製品や石劍である。

また、（8）については、大きさは5.4cm×3.8cmで重さは118 gで一部欠損しており、材質は滑石製で用途としては石權（天秤權）と思われる（後述）。石劍（11）が床面上から出土しているが、土坑の直上なので削平された土坑の遺物とも考えられる。材質については董青石ホルンフェルスの可能性を能登原孝道氏が指摘している。

土坑 S-015

土坑 S-015 の出土遺物は弥生土器と磨製石器と動物遺存体である。弥生土器は甕（1）（3）と壺の底部の破片（2）が出土しており、磨製石器は層灰岩製の片刃石斧であり、動物遺存体は獸骨と貝が出士しており、貝は牡蠣の割合が多い。



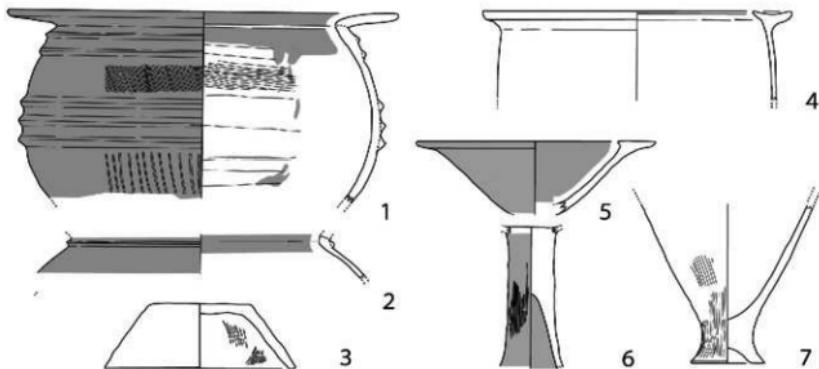
(Fig. 9) 土坑 S-015 出土遺物



(PL. 1) 土坑 S-015 出土獸骨

土器集積 S-006

土器集積 S-006 の出土遺物は弥生土器の壺（1）（2）・甕（7）・高环（5）（6）・器台（3）である。壺や高环（1）（2）（5）（6）には赤彩が施されている。このうち、1の壺は赤色顔料を塗布した後に磨きを施した土器である。



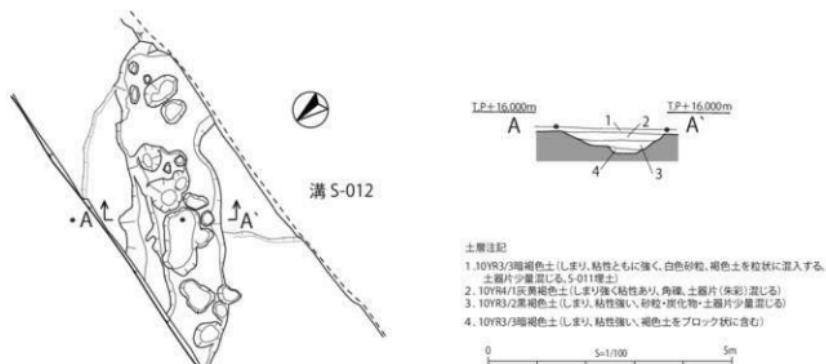
(Fig. 10) 土器集積 S-006 出土遺物

堅穴建物 S-020

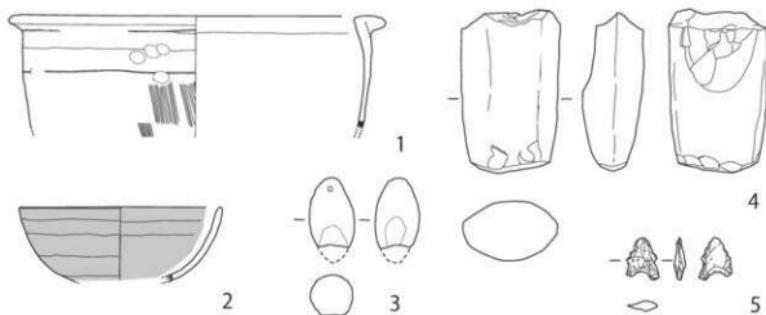
調査区中央より西側に位置する堅穴建物で方形の形状を呈しており、径が2.2mでわずかに隅丸の形状を呈している。造構の上部は後世の開発などにより大きく改変を受けており、詳細な形状は不明である。ピットや炉といった造構は特に確認されていない。

溝状造構 S-012

調査区中央付近に位置する造構で、北西から南東方向へ延びており、断面は船底形の形状を呈している。埋土は10YR 3/2や10YR 3/3黒褐色粘土で粒子の細かい粘土で構成されており、ラミナは見られない。これは水の流れが常になく、ヘドロ状に堆積していることを示している。



(Fig.11) 溝状造構 S-012 平面図・断面図 (1/100)



(Fig.12) 溝状造構 S-012 出土遺物

溝状造構 S-012 の出土遺物は弥生土器（1）と（2）・土製品（3）・磨製石器（4）・打製石器（5）で構成されている。弥生土器の甕は体部に一条の沈線が施されている。鉢は赤色顔料が両面に施されている。土製品には紡錘型土弾が出土している。長さ3.0cm、幅1.8cmである。磨製石器（4）は福岡県今山産の玄武岩製の石斧で、打製石器（5）は黒曜石製である。

ピット S-009

ピット S-009 は堅穴建物 S-010 に対して上面から切り込んでいる遺構である。大きさは長径 60cm 短径 40cm 程の楕円形である。ピットは周辺から多数検出しているが、埴立柱建物として確認することはできなかった。遺構から土師器の模倣坏身が出土している。復元口縁が 12.3cm で、口縁部の立ち上がりが低いといった特徴がある。



(PL.2) ピット S-009 遺物出土



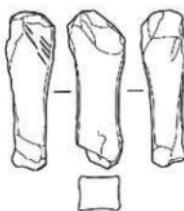
(Fig.13) ピット S-009 出土遺物 (S=1/3)

ピット S-023

ピット S-023 は調査区東端に存在し、堅穴建物 S-013 と重複する遺構である。周囲に多くのピットが検出されていることから、単独の遺構ではなく、別の遺構の可能性も考えられるが、調査区外へ広がるため詳細は不明である。ピットから三面に顕著な使用痕がある天草産砂岩製の大型砥石が出土している。



(PL.3) ピット S-023 遺物出土

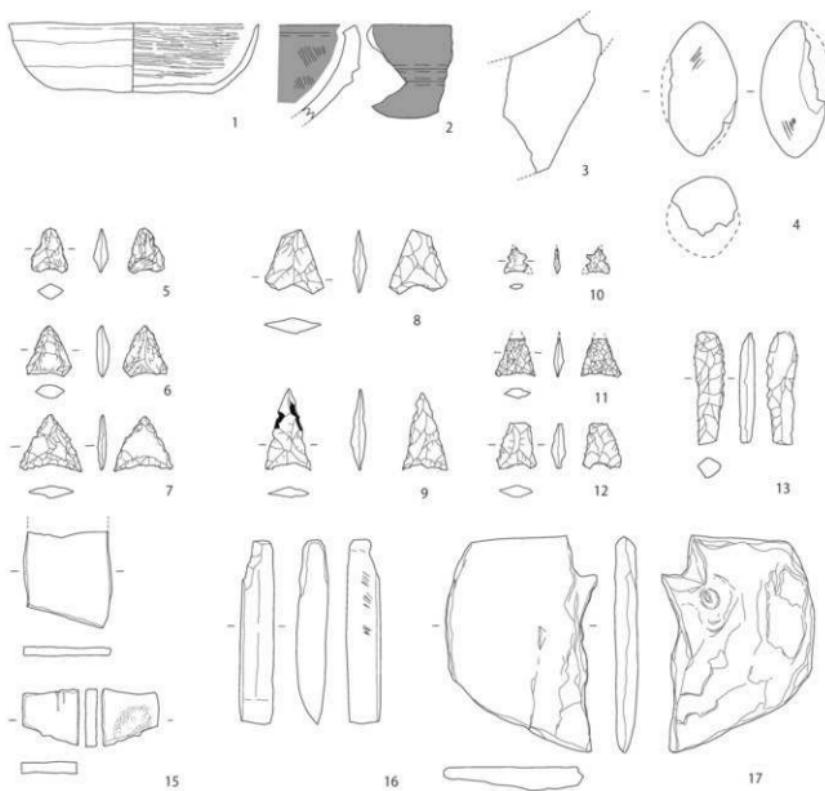


(Fig.14) ピット S-023 遺物 (S=1/4)

第3節 包含層出土遺物について

今回の調査で表土から包含層内にかけて数多くの遺物が出土した。構成される遺物は土師器（1）・弥生土器（2）・土製品（3）（4）・石器（5から11）・磨製石器（13）（14）・石製品（12）である。包含層の中に弥生土器と古代の土師器も混じって出土している。このことから周辺では大規模な遺跡の整地が行われたと考えられる。

弥生土器には赤色顔料が施されている遺物が多くみられ、細片での出土が多い。実測ができない細片遺物については PL.4 の写真で紹介する。特筆するものとして土製品の紡錘型土弾や砥石などの遺物が出土している。



(Fig. 15) 包含层出土遗物



(PL. 4) 包含层出土赤彩土器

土器・土製品

番号	番号	通番号	被覆等	口径	底径	高さ	外周	内周	色調	内面	
Fig5	6-1	S-013	素面	24.4	-	(11.0)	ナチュラル明	ナチュラル	10YR6/2 淡黄褐色	DYR6/6 に淡い褐色	
Fig5	6-2	S-013	上層	25.6	-	6.60	ハケ、ナチュラル	ナチュラル	5YR5/6 明赤褐色	5YR5/6 明赤褐色	
Fig5	6-4	S-013	粘土壁土層	-	-	4.5	ナチュラル	ナチュラル	2.5YR3/3 黄褐色	-	
Fig5	8-1	S-010	素面	18.6	-	61.3	ハケ、ナチュラル	ナチュラル	10YR6/3 に淡い褐色	10YR6/2 に淡い褐色	
Fig5	8-2	S-010	柱穴内	34.4	-	18.0	ハケ、ナチュラル	ナチュラル	10YR6/3 に淡い褐色	10YR6/2 に淡い褐色	
Fig5	8-3	S-010	柱上	16.9	-	3.6	口縁部は削りぬきナチュラル	ナチュラル	10YR6/4 に淡い褐色	10YR6/4 に淡い褐色	
Fig5	8-4	S-010	柱上	21.6	-	20.0	ハケナチュラル	ナチュラル	10YR6/2 黄褐色	10YR6/4 に淡い褐色	
Fig5	8-5	S-010	F型	-	6.4	(6.1)	削りのため不明、削り痕	ナチュラル	10YR6/4 に淡い褐色	10YR6/2 淡黄褐色	
Fig5	8-6	S-010	上層	12.5	13.0	14.9	ハケナチュラル	ナチュラル	10YR6/5 明褐色	10YR6/4 に淡い褐色	
Fig5	9-1	S-015	中層	10.7	-	4.1	ハケナチュラル	ナチュラル	10YR6/4 に淡い褐色	7.5YR6/4 に淡い褐色	
Fig5	9-2	S-015	中層	-	-	7.6	(4.6)	ナチュラル	10YR6/4 に淡い褐色	10YR6/4 に淡い褐色	
Fig5	9-3	S-015	上層	7.6	-	4.60	ナチュラル	ナチュラル	10YR6/4 に淡い褐色	10YR6/4 に淡い褐色	
Fig10	10-1	S-006	丸脚両耳	32.0	-	(15.7)	ナチュラル、ミガキ	ナチュラル	10YR6/4 に淡い褐色	10YR6/4 に淡い褐色	
Fig10	10-2	S-006	一耳	垂	-	-	(3.7)	ナチュラル	ナチュラル	7.5YR7/6 淡褐色	7.5YR7/6 淡褐色
Fig10	10-3	S-006	中層	石台形容土層	8.4	15.8	5.3	ナチュラル	ハケ、ナチュラル	10YR6/4 淡黄褐色	10YR6/4 淡黄褐色
Fig10	10-4	S-006	中層	垂	25.4	-	17.3	ナチュラル	ナチュラル	10YR6/4 淡黄褐色	10YR6/4 淡黄褐色
Fig10	10-5	S-006	中層	高坪	19.8	-	6.00	ナチュラル	ナチュラル	10YR6/4 浅褐色	10YR6/4 浅褐色
Fig10	10-6	S-006	中層	垂	-	(11.7)	ハケ、ナチュラル	ナチュラル	10YR6/4 に淡い褐色	10YR6/4 に淡い褐色	
Fig10	10-7	S-006	中層	垂	-	6.0	(13.0)	ハケ、ナチュラル	ナチュラル	明褐色(10YR7/3) 深黄褐色(10YR7/3)	10YR6/4 に淡い褐色
Fig12	12-1	S-012	3脚	垂	15.6	-	9.23	ハケ、ナチュラル	ナチュラル	10YR6/3 に淡い褐色	10YR6/3 に淡い褐色
Fig12	12-2	S-012	2脚	垂	8.4	-	9.0	ナチュラル	ナチュラル	10YR7/3 に淡い褐色	10YR7/3 に淡い褐色
Fig12	12-3	S-012	2-3脚	粘土壁土層	-	-	3.0	ナチュラル	ナチュラル	10YR7/4 に淡い褐色	10YR7/4 に淡い褐色
Fig13	13-1	S-009	2脚	河原	12.3	-	4.5	ナチュラル、ミガキ	ナチュラル、ミガキ	7.5YR7/6 淡褐色	7.5YR7/6 淡褐色
Fig15	15-1	表様	-	土器苗穀	8.0	10.4	4.4	ナチュラル	ミガキ	10YR6/3 に淡い褐色	10YR6/4 に淡い褐色
Fig15	15-2	表様	-	高台	-	-	8.0	ナチュラル	ナチュラル	10YR7/4 に淡い褐色	10YR7/4 に淡い褐色
Fig15	15-3	表様	-	胎台形?	-	-	0.0	ナチュラル	ナチュラル	10YR7/2 に淡い褐色	10YR7/2 に淡い褐色
Fig15	15-4	表様	-	粘土壁土層	-	-	4.4	ナチュラル	ナチュラル	2.5YR5/2 淡黄褐色	—

石器・石製品

番号	番号	出土場所	種類	法線 (cm)	高さ	石材	参考
Fig8	6-3	床下土	瓦片	1.5	0.5	0.4	0.62 ナチュラル
Fig5	6-5	S-013	床下土	片岩	15.80	(12.2)	14.90 ナチュラル
Fig5	6-6	S-013	柱穴内	片岩	4.3	2.1	0.7 ナチュラル
Fig5	6-7	S-013	柱穴内	片岩	3.0	1.8	0.6 ナチュラル
Fig5	6-8	S-013	柱穴内	片岩	(2.4)	2.3	0.4 ナチュラル
Fig5	6-9	S-013	下層	砾石	8.3	5.3	6.5 ナチュラル
Fig5	6-10	S-010	下層	石子砂	69.6	5.0	0.6 ナチュラル
Fig8	8-0	S-010	下層	石子砂	5.4	3.8	3.4 ナチュラル
Fig8	8-9	S-010	下層	片岩	5.6	2.3	0.8 ナチュラル
Fig8	8-10	S-010	中層	片岩	2.4	1.5	0.6 ナチュラル
Fig8	8-11	S-010	床下	標印石	(15.1)	4.1	0.8 ナチュラル
Fig8	9-4	S-015	上層	片岩	15.25	1.9	0.7 ナチュラル
Fig12	12-4	S-012	上層	片岩	(13.39)	7.0	5.0 ナチュラル
Fig12	12-5	S-012	上層	片岩	1.7	1.4	0.4 ナチュラル
Fig14	14-1	S-023	下層	砾石	32.5	11.5	6.5 ナチュラル
Fig15	15-5	—	瓦片	2.9	2.3	1.9 ナチュラル	
Fig16	15-6	—	瓦片	3.2	2.9	0.8 ナチュラル	
Fig17	15-7	—	瓦片	1.8	2.0	0.4 ナチュラル	
Fig18	15-8	—	瓦片	(2.0)	1.9	0.5 ナチュラル	
Fig19	15-9	—	瓦片	2.6	1.5	0.4 ナチュラル	
Fig20	15-10	—	瓦片	11.60	(1.5)	0.3 ナチュラル	
Fig21	15-11	—	瓦片	12.40	2.5	0.7 ナチュラル	
Fig22	15-12	—	瓦片	1.0	1.5	0.4 ナチュラル	
Fig23	15-13	—	瓦片	3.6	0.9	0.6 ナチュラル	
Fig24	15-14	—	瓦片	66.11	5.6	0.6 ナチュラル	
Fig25	15-15	—	瓦片	13.60	6.00	0.60 ナチュラル	
Fig26	15-16	—	瓦片	15.50	1.1	0.9 ナチュラル	
Fig27	15-17	—	瓦片	4.40	4.0	0.7 ナチュラル	

(Table 1) 遺物観察表

第4章 まとめ

今回の調査において、年の神遺跡が様々な時代の生活痕跡を残す複合遺跡であることが確認できた。出土遺物から少なくとも弥生時代中期初頭から弥生時代後期前葉に至るまで堅穴建物が複数検出された。遺構から須恵器の模倣土師器の壊身や包含層から古代の壺が出土していることから、人々が連続して居住している可能性が高くなつた。

調査区中心部付近において、存続時期がはつきりとしないが、溝状遺構を検出した。周辺では支石墓や甕棺を多数確認しており、隣接地付近では支石墓と思われる巨石が出土したとの地元の証言があることから、周溝墓の存在も考えられる。しかし、調査区が狭小であるため、溝状遺構の性格が集落を分ける溝なのか、墓域などの区画溝や周溝なのか、今回の調査では断定できなかつた。

また、ピットを多数検出しており、その中に古代の遺物が含まれていることから、古墳時代や奈良時代の遺構面が存在している可能性は高い。

遺物については、堅穴建物 S-010 の出土遺物の中から円柱形石製品が出土したことはすでに述べてゐる。この中で天秤権の可能性について触れてみる。

出土した円柱形石製品について武末純一氏に石製品を実見していただき、その中で天秤権の見分け方についてご教示を賜つた。特徴として、上下の角は欠けないように面取りを施し、体部にも転がらないように面取りを丁寧に施している。

のことから一部欠損しているが、その条件にあてはまるものとして天秤権であると判断した。時期については、共伴している土器と他の出土例から弥生時代中期後半と比定している。なお、天秤権は重量を正確に把握する必要があるため、欠損部分の容積を復元し、重量を特定するように指摘を受けている。

なお九州の出土例は福岡県東小田峯遺跡・那珂遺跡・須玖遺跡群・佐賀県本行遺跡で確認され、熊本県では初めての事例である。このことから集落は何かしらの交易拠点であった可能性があり、年の神遺跡の性格を示している。今後の調査に期待したい。

参考文献

- 齋父雅史 2017 玉名市文化財調査報告第33集『玉名市内遺跡調査報告書Ⅸ』「年の神遺跡」玉名市教育委員会
森本晋 2012 「弥生時代の分銅」『考古学研究59-3』考古学研究会
中尾智行 2015 「弥生分銅の発見とその意義」『計量史学研究』一般財団法人日本計量史文化研究会第76集
東森晋 2018 「島根県の弥生時代天秤権類例」『島根考古学会誌』島根考古学会
中尾智行 2018 「弥生時代の計量技術－畿内の天秤権－」『考古学研究65-2』考古学研究会
輪内達 2020 「近畿地方の權衡資料－弥生時代例の再検討－」『平成30年度九州考古学会総会』九州考古学会
武末純一 2020 「日韓の權」『新・日韓交渉の考古学－弥生時代－（最終報告書 論考編）』新・日韓交渉の考古学－弥生時代－研究会 新・韓日交渉の考古学－青銅器～原三国時代－研究会
葉山茂英 2020 「考古遺物から見た弥生時代の天秤」『考古学研究67-1』考古学研究会

写真図版



(PL. 5) 調査区全景



(PL. 6) 壓穴建物 S-013 検出



(PL. 7) 壓穴建物 S-013 検出



(PL. 8) 壓穴建物 S-013 断面



(PL. 9) 壓穴建物 S-013 完掘



(PL.10) 壓穴建物 S-014 検出



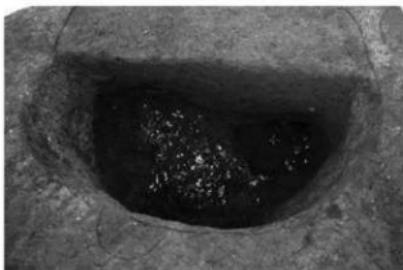
(PL.11) 壓穴建物 S-014 検出



(PL.12) 壓穴建物 S-010 遺物出土



(PL.13) 土器集積遺構 S-006 遺物出土



(PL14) 土坑 S-015 断面



(PL15) 土坑 S-015 完掘



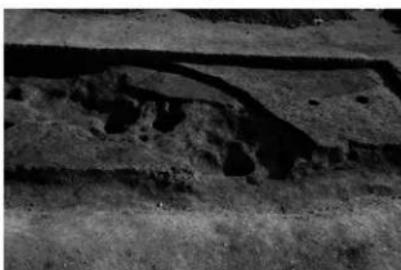
(PL16) 壴穴建物 S-010 完掘



(PL17) 壴穴建物 S-010 完掘



(PL18) 溝状遺構 S-012 検出



(PL19) 溝状遺構 S-012 完掘



(PL20) 作業風景遺構検出



(PL21) 作業風景遺構掘削



(PL22) 土器集積遺構 S-006 出土遺物



(PL23) 壓穴建物 S-010 出土遺物



(PL24) 壓穴建物 S-013 勾玉



(PL25) 壓穴建物 S-010 磨製石劍



(PL26) 壓穴建物 S-010 石權（天秤權）



(PL27) ピット S-023 出土砥石



(PL28) 紡錘型土弾



(PL29) ピット S-009 模倣土師器

報告書抄録

遺跡名	年の神遺跡							
ふりがな	としのかみいせき							
調書名	玉名市岱明町野口における宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告							
シリーズ名	玉名市文化財調査報告							
シリーズ番号	第 52 集							
編著者名	石松 直 薩父雅史							
編集機関	玉名市教育委員会							
所在地	〒 865-8501 熊本県玉名市岩崎 163 TEL : 0968 - 75 - 1136 FAX : 0968 - 75 - 1138							
発行年月日	2023 年 3 月 17 日							
所取遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	発掘調査期間	調査面積	発掘要因
年の神遺跡	熊本県玉名市岱明町野口 2466-1	43206	429	32° 55' 17" (32.92149083)	130° 31' 15" (130.520920)	2022.02.01 ~ 2022.02.28	88.8m ²	宅地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	突起事項			
年の神遺跡	集落	弥生時代	堅穴建物 溝 土坑	弥生土器 磨製石劍 勾玉 石椎 (天秤椎)	堅穴建物跡床面から磨製石劍と勾玉と石椎 (天秤椎) が出土した。			
要約	年の神遺跡は縄文時代からの複合遺跡で、今回の調査で弥生時代中期の堅穴建物を複数検出した。堅穴建物跡から勾玉や石椎 (天秤椎)、磨製石劍や赤彩土器を多数出土した。							

玉名市文化財調査報告 第 52 集

年の神遺跡

令和 5 年 3 月 17 日発行

編集発行 玉名市教育委員会

〒 865-8501 熊本県玉名市岩崎 163
TEL 0968-75-1136

印刷・製作 株式会社 有明印刷
〒 865-0022 熊本県玉名市寺田 123-1
TEL 0968-73-2055